

氏名	原仲 碧		
学位の種類	博士（コーチング学）		
学位記番号	博甲第	8299	号
学位授与年月	平成 29年 3月 24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	育成年代サッカーコーチのコーチング実践における ライフストーリー的リフレクションの可能性に関する研究		
主査	筑波大学准教授	博士（コーチング学）	中山雅雄
副査	筑波大学教授	博士（工学）	浅井 武
副査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	渡辺良夫
副査	筑波大学教授	教育学博士	清水 諭
副査	東北大学教授	博士（教育学）	北村勝朗

論文の内容の要旨

原仲碧氏の博士学位論文は、日本の育成年代サッカーコーチのコーチング実践をライフストーリー研究によって検討するものであり、その要旨は以下のとおりである。

第1章では、コーチング学領域におけるこれまでの成果と課題が整理されている。本研究の背景について、日本の育成年代サッカーの現状ならびに先行研究の概観から、コーチングを対象とした質的方法論による研究の有する可能性について言及し、サッカーコーチング領域において本研究をおこなう意義が論じられている。さらに、本研究の目的について論じ、採用する方法論であるライフストーリー法ならびに意味解釈法のコーチング学領域における課題が検討されている。最後に、本研究の構成と主な資料となる参考論文について記述されている。

第2章では、日本の育成年代サッカーコーチのコーチング実践知についてライフストーリー法を用いて詳細に記述することで「コーチング」の再考が試みられている。その結果、コーチは自らのコーチング実践を省察的思考によって振り返るなかで、コーチとしての成功体験を好意的に捉えるだけでなく、失敗事例も誠実に受容しつつ、選手育成に関する長期的な視点から日々のコーチング実践において有機的改善を絶えず繰り返していることを明らかにした。また、コーチが過去の経験から学び、自らのコーチングを「省察的思考による受容」をもとに「有機的改善の継続」によって、コーチとしての熟達化に向けた日々実践することの重要性も指摘している。これらのことをまとめ「コーチング」を「コーチによるコーチング実践によって、コーチ自身を成長させる営みである」といった従来にない視点によって再考し、コーチング実践思考モデルが提示された。そして、はコーチが自らのライフストーリーを語ることによって経験を振り返り、自らのコーチングをどのように捉えているのかを追考することによって生成される新たな気づきは、対象としたコーチ本人にとっただけでなくコーチング学への貢献という観点においても中枢的な知見になり得ることを指摘

している。

第3章では、日本の育成年代サッカーコーチを対象にしたライフストーリー法を用いた詳細な記述から、調査者-調査対象者の対話の構築に着目しつつ、コーチのコーチングに関するリフレクション（振り返り）が論考されている。その結果、コーチが自らのコーチングに対して、「合理性重視」「反省性重視」の二極に特徴を有する「批判的思考」および「批判的視点」を用いてリフレクションすることが、コーチの成長ならびにコーチングの向上においてきわめて重要であることが明らかにされた。昨今の日本のスポーツ現場では体罰・暴力、セクハラ、不当な金銭授受等、重大な問題が後を絶たず、スポーツ現場の統括的立場にあるスポーツ庁は、各種競技団体、スポーツクラブ、学校部活動等のコーチや教員への信頼感の低下によるコーチングの危機を指摘している。それに対して、コーチとによる対話によって紡ぎ出されたコーチング実践知の語りや生成された視座は、その解決策の一助となり得るとしている。さらに、本章における対話的構築主義に依拠して導きだされたライフストーリーの語りはコーチが自らのコーチング実践に対するリフレクションにおいて批判的思考を活用することによって批判的思考態度が涵養される思考様式であると理解することできるとは指摘している。最終的に、コーチがコーチング実践におけるリフレクションを通じて批判的思考、批判的視点を会得し、批判的視点にもとづく批判的思考をコーチング実践に取り入れることは、選手の育成ならびにコーチ自身の成長において欠かすことのできない「構え」であり、コーチのコーチングの改善、発展につながることを指摘している。

第4章は本研究の結論である。はコーチが、適切な関係性、距離感において、コーチング実践に関する「リフレクション（振り返り）の場」を設定し、自らのコーチングについてライフストーリー的に語り、リフレクションすることで、コーチのコーチング観を形成する「核心（core）」に迫ることが可能となると述べている。そこから、コーチが自らのコーチング実践について整理することは、コーチとしての成長につながる契機となり得ることに加え、各々のコーチのコーチングに対する考え方の「根幹（basis）」を探る機会としての役割が期待されることを明らかにした。また、本論で対象とした日本の育成年代サッカーにおける優秀なコーチは、個人や他のコーチの経験のみに頼り、踏襲するのではなく、それらの経験を「糧」とすることで、コーチング実践を、より高いレベルに向けて「前進（progress）」させていくことの重要性について理解していることも明らかにした。

審査の結果の要旨

（批評）

日本のスポーツ、サッカーのコーチング領域においてこれまであまり議論されることがなかった「反省的实践家」や「わざ言語」といった側面からのコーチング実践の検討によって、コーチが自らの実践をリフレクションすることの意義と効果を明らかにした本研究はコーチング学領域に新たな知見を示したと評価できる。

平成29年2月3日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。